

第3章 松田伝十郎と間宮林蔵の樺太踏査

松田伝十郎と間宮林蔵のカラフト踏査は、それまで幾度か繰り返された踏査に比べると、大きな進展をもたらすものだった。

幕府の樺太踏査は天明5年(1785)の庵原弥六、翌6年の大石逸平、寛政4年(1792)の最上徳内、享和元年(1802)中村小市郎、高橋次太夫らと数回に及ぶカラフト踏査とそれ以前にも松前藩士によって行われてきたが、最も遠いところで東海岸はナイブツ、西海岸はシャウヤ崎あたりまでだった。文化年間に入ってロシア船の行動がはげしくなって来ており、樺太奥地の踏査が必要とされていた。

1. 渡樺

東蝦夷地に続いて西蝦夷地の幕府直轄に伴い、津軽藩兵と共に北方警備のため宗谷で越冬中の幕吏松田伝十郎が樺太踏査の命をうけたのは、文化5年2月16日のことだった。翌3月13日に同行の間宮林蔵が番人万四郎をともない、函館より幕府差回しの囀合船で宗谷に着任している。

そのとき最上徳内も宗谷に来ており、伝十郎にアイヌの風俗で行けといい、深山宇平太は武士の姿で行けという、外国の境界に入る以上は、必ず捕えられることを覚悟しなければならないからであった。そこで伝十郎は、そのような場合、地理調査の目的を隠して討死すべきか、あるいは捕虜となっても目的を達するよう努力すべきか、奉行に指令を仰いでいる。指令の内容は不明だが、大刀を持たぬ武士の姿であった。

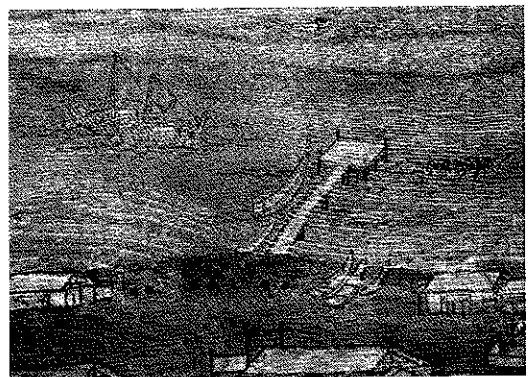
二人が宗谷を発ったのは、更に一カ月後の4月13日(1808.5.8)だった。

出発にあたって、それまで仁三郎といった松田はここで養父名を継いで伝十郎と名乗り、また調役下役元締に昇進している。伝十郎は出発にあたり、友人や輩下に悲壮な決意を伝えて別れた。(以下、北夷談現代訳より)

「同年カラフト島奥地の山韃地とわが国支配地との境の査察を命じられたことを、吟味役高橋三平がソウヤへ印状を持って来て告げた。あわせて御雇間宮林蔵を連れていけという命も告げた。また大船で行くと行動に自由が利かないので小舟で行け、その場合には飯米などを多く持っていけないので、干し魚を持参して食料とするのでなければ、何カ月もかけて査察はできないと書類をもって命じられた。

この査察のために、カラフト島奥地の様子を宗谷の住民に尋ねても、大陸と陸続きなのか離島であるのか一向に分からない。昨年渡来のロシア船が今年カラフト島へ必ず渡来すると言いつ残したと夷人が話している。そうすると異国船の来るのは北から南に向かってである。伝十郎は南から北へ向かうのであるから沖合で行き合うかもしれない。こちらは小舟だから捕虜にならないともいえない。その上、前文の命令書があるから穀物を主食とする召し使いは一人も連れていけない。

召し使いはソウヤにおいて暇を申し渡し、江戸へ帰府せよと申し渡したが、一人も承知しない。



渡樺の船

彼らは田舎育ちだから今更急に穀物中心の食事を魚や肉を中心のものに変えると生命にかかわるかもしれない、辺境の地で一大事に合ったときは足手まといになると、いろいろ説得し、やっと納得させ渡海の準備をした。丈夫な夷人だけを召し連れるつもりである。また、困難な査察は死を決して奥地に行かねばならない。奥地で命を落とすか異国船に捕られるか、または、年を越し帰国しないときは、ソウヤ出船の日を忌日と定めよと言いつけて、帰らせた。召し使いたちによくよく申し含め、江戸に着いたら家内の者へ伝えよと命じたが、留守宅でこれを聞いたら嘆きが増すばかりだろう。

幕命は重いので死を決して、四月十三日、この日は沖合が穏やかで風向きも良かったので林蔵を伴い一同はソウヤを出船した。そのとき会所の支配・番人は言うまでもなく、所の長老をはじめそのほか役付きの夷人たちが海岸へ出て私たちの乗った船の姿が遙かになるまで見送る。その中に暇(ヒマ)を出された従者らも海岸に出て落涙している様子である。もっともなことであるが、見ないふりをして順風に任せて帆走していくと、その日のうちにカラフト島のシラヌシという所へ着岸した。」(『北夷談(現代訳)』樺太探検・北方経営の先駆者 松田伝十郎の蝦夷地見聞録)

伝十郎のそういう決意は、また林蔵のものでもあった。特に林蔵には、前年ロシア人が東蝦夷地



間宮林蔵渡樺の地

の択提島を攻めてきたとき、討って出ることを主張したが聞き入れられずに敗走を余儀なくされたことが心に傷あとを残していた。それを今度の踏査によって発散しようとしていたかも知れない。決意は伝十郎に劣ってはいなかった。当時、まだ宗谷駐屯の津軽藩兵に引揚命令がないため、友人の山崎半蔵がいたが、その半蔵に林蔵はその心境を語り残して宗谷を発った。(稚内市史に一部加筆)

2. 踏査

文化5年4月17日、松田伝十郎と間宮林蔵の二人は白主において準備をととのえ、二手にわかれた。しかし、この北方地域の脅威が増している中での踏査には、強い意志と勇気が必要であり、頼りになるのは自分だけだった。

「もし奥地に至って舟で進めない場所があったら、山越えをしてでもどうにかして一度出会うことを固く申し合わせ(北夷談)」、伝十郎は西海岸を、林蔵は東海岸をそれぞれ北へ進んだ。二人は数多くの苦難を乗り越え、伝十郎は6月19日(1808.7.12)、ラッカ岬に着き、海草が腐食して歩くこともできない海岸の状況から推定して、山丹地マンコウ川(黒竜江、アムール河)の河口を認めた。北夷談によると、「ここから山鞆地へは海上四里ほどで、草の色さえもよく分かる。地名カマウタ、モテップなどの山々を目印に方角を計り地図を描く。このラッカという所から先は、海藻が腐れ深く踏み込み一里も進むことができない。」として帰途についた。

一方、林蔵は北知床半島の地峡部を越えてオホーツク海に抜け、更に進もうと漕ぎ出したが小舟は波浪にほんろうされ、そこから先には容易に進むことができず引きかえし、最狭部の真



間宮林蔵の肖像

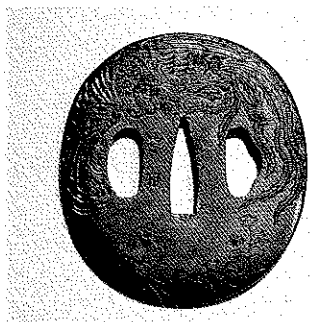
縫から山道を西海岸に抜けて北上、20日ノテトで引きかえしてくる伝十郎と再会することができた。

ここで「林蔵は、『伝十郎が行った所まで行かなかったのでは申し訳ない、明日にも波が静まり次第渡海して、もっと奥地を査察したい』と言う。ところが林蔵だけでは、夷人は一人も行きたくないという。林蔵はどうにも仕方がないので、伝十郎の同道を頼み、迷惑ではあったがやむを得ず再度ナッコに渡海してラッカ崎に行き、ここを国境と見定めたので、ここから奥の方へ一里でも行ったら林蔵の手柄である、何とかして行ってみろ、と勧め、ナッコに戻って丸小屋に泊まった。間もなく林蔵が戻ってきて言うには、ラッカ崎から少しでも先へ歩いていくのはとてもできないので、諦めて戻ってきたとのことだ。その後、なぎを待ってノテトへ帰る(北夷談)」

二人のカラフト踏査はこれで終わったが、林蔵は引きつづき探検に乗り出さなければならなかった。

二人が宗谷に帰ると、津軽藩に代って警備についた会津藩兵の士気鼓舞のため松前奉行河尻春之がきていて、伝十郎から踏査の復命をうけ、直ちに林蔵に再踏査を命じたのである。北夷談によると「伝十郎は、鎮台村垣淡路守が在務しているので早々に松前へ行き、奥地査察の結果を申し上げよ。林蔵儀は、伝十郎が言い付けた通り東海岸奥地まで行かねばならないのに、シレトコから引き返したのは、職務不十分である。そこで再査察を命じる。シレトコから奥の見残しの場所を見届けてこい」と命じられた。

3. 交替の会津藩にも犠牲



内藤源助愛刀の鐔

蝦夷地における文化5年の警衛状況をみると、秋田、庄内2藩の兵を撤収して、仙台、会津の2藩を主力に東西蝦夷地に配置された。

会津藩兵1,633人は、松前、宗谷、利尻、樺太に分駐することになり、家老北原采女、内藤源助を陣将として正月早々若松城を次々と発ち、4月8日松前において集結、そこに番頭三宅孫兵衛の指揮下に266人を置き、他は同13日6隻の軍船に分乗して松前を進発、同17日宗谷に入港、内藤源助、梶原平馬が622人を率いて上陸、ここにおいてすっかり越冬疲れしていた津軽藩兵と交代したのである。

一旦宗谷に上陸した梶原平馬は622人のうち252人を率いて利尻へ、樺太には残り745人をしたがえた北原采女、番頭日向三郎右衛門、軍監丹羽織之丞らが渡り、19日久春古丹において陣営の建設にあたり、翌5月には留多加にその一隊を分駐させた。実に手際よくはこぼれ、その備えは一段と強化された。

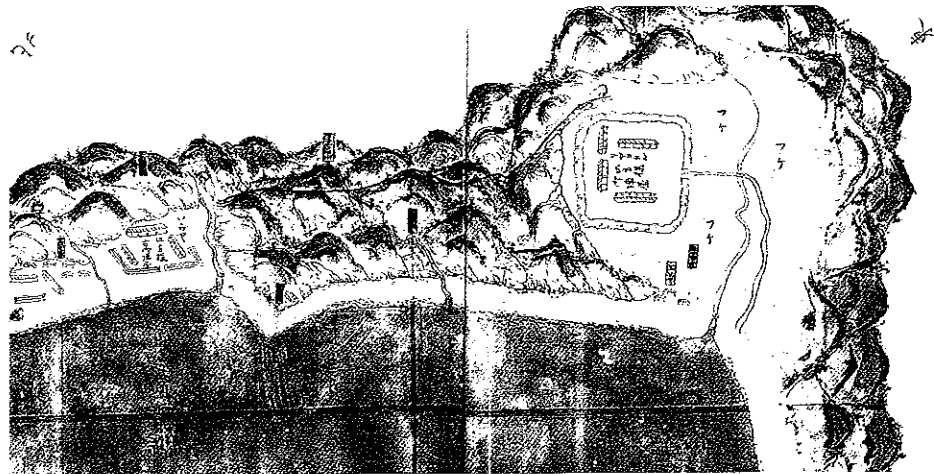
露寇(ロコウ)のあった樺太、利尻に重点の置かれた配備であり、再び襲来したばあい一挙に叩き潰そうという態勢がとられたものであるが、そして、6月から7月にかけて松前奉行河尻春之みずから宗谷に滞在して指揮にあたり、わざわざ長崎遠見番を呼び、ピリカタイに遠見所をもうけるという物々しさであったにもかかわらず、ロシア船はいっこうに姿を現わさ



会津藩士の墓

なかった。

樺太や利尻沖で掠奪の限りをつくしたフオストフとダビドフは前年の6月11日オホーツクに引揚げたところ、2人は同地の長官ブハーリソ海軍大佐に逮捕され獄につながれ、ユノとアホシの両船も抑留されてしまったのであった。



リヤコタン御陣屋

日本の北方警備の物々しさは空転を余儀なくされたのであったが、前4年の苦難を再び経験し犠牲を強いられることになった。

陣将北原采女に従って出陣していた参謀高津泰の『終北録』によると、宗谷、利尻、樺太において50余人が死亡したとあり、また『蝦夷地御人数覚』には、死亡の者として、侍分8、与力2、金鼓角の者1、足軽並長柄の者18、医師1、作事方の者1、同荷担の者2、小者共16、計50人となっており、医者さえも犠牲になった。(稚内市史を一部訂正)

宗谷でどれだけの人数が犠牲になったのかは不明だが、宗谷歴史公園の旧藩士の墓の中に三基の墓がある。

文化五年六月 会津 要 久右衛門墓

文化五年戊辰七月八日 会津 原田喜十郎記里墓

文化五年戊辰七月十日 会津 平田八十八保実墓

また、利尻島の利尻富士町鴛泊本泊慈教寺に3基、鴛泊字栄町ペシ岬広場に3基、利尻町沓形字種富町に2基、羽幌町焼尻島に2基の墓がある。

4. 文化6年からの警備

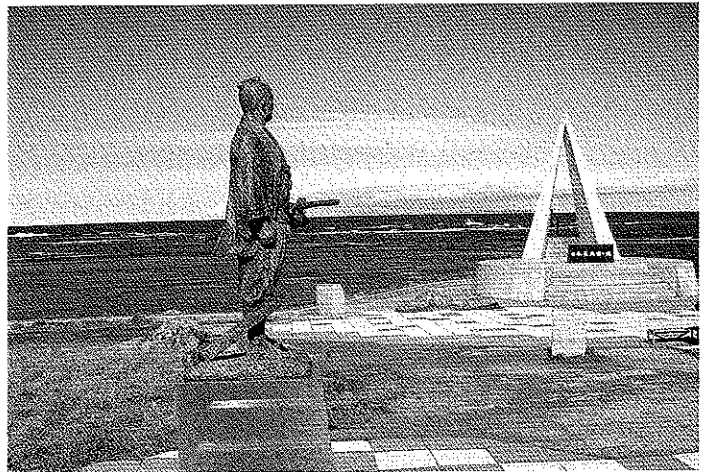
宗谷、利尻、樺太における文化6年からの警備には再び津軽藩があたることになる。

幕府は南部藩に東蝦夷地を、西蝦夷地を津軽藩に永久警衛を命じたからだった。ただし利尻守備は同7年正月をもって撤廃され、また同年3月には寒気のはげしい宗谷、樺太も増毛までさがって越冬することが認められた。最初、この警備に津軽藩は総勢450人を配備につけ、このうち250人が越冬することになっていたが、同7年以後の勤番人数は342人となり、同11年まで毎年交代出動した。ところが、同10年にロシア人ゴローニン事件の解決があったので、同11年10月時の松前奉行服部貞勝の建議により、同12年以後は津軽、南部藩の奥地派兵が中止され、南部は箱館に200人、津軽は松前に100人の駐屯に変わり、文政4年(1821)幕府の蝦夷地直轄廃止と共にこれは完全に終わりを告げた。

利尻での越冬は翌6年正月をもって廃止、宗谷、樺太は雪融けまで守備駐屯したが、一度悲惨な経験をなめた津軽藩のそのときの備えは慎重であった。青森県史第二巻津軽歴代記類によると『文化7年2月朔日、松前御用懸り笠原八郎兵衛趣意にて、松前奥地越冬の御人数足軽以下の皮衣を製

し候に付、犬狩被仰付、狩取候皮数凡八百余枚、上中下に従ひ代銭被下置候』といったように出動藩兵の身仕度にも配慮がなされたのである。外敵に備えると共に内敵水腫病に対する神経も大変であったのだが、備えあれば憂いなしのたとえどおり、陣没者の数は驚異的な減少をみせた。津軽亡霊簿による津軽藩陣没者は次のような推移をたどった。

	出張人員	越年者	陣没者	
文化2年	261		20	
文化3年	258		13	
文化4年	1,002	603	43	
文化5年	708	250	119	
文化5年4月～11月北方警備から会津着まで(会津藩)				
	1,633		50	
文化6年	513	177	32	
文化7年	419	250	10	(稚内市史に一部加筆)



宗谷岬の間宮林蔵